1票の重み実感して

若者低調、市選管が出前講座

秋までに衆院選が見込まれ、10月には任期満了に伴う市長選が予定される。2016年に選挙権年齢が20歳から18歳に引き下げられたが、若者の投票率は低調。市選管は、主権者教育の一環で市内の高校や小学校で出前講座を重ね、1票の重みを訴えている。

政策比較、開票体験も

玉野高

24日は玉野高で2、3年生計約280人による市長の模擬選挙を実施。生徒たちは、企業誘致による産業振興を訴える男性(62)、観光振興による活性化を掲げる女性(46)という架空の候補者に自らの考えで1票を投じ、選挙に参加する意義を学んだ。

市選管事務局の三ノ上創次長が18～19歳よりも20～29歳の方が投票率が低い傾向にあると紹介。「面倒くさいし、よく分からない」「投票しなくても世の中は変わらない」といった理由で若者が選挙に行かないことから、あらかじめ候補者の政策を比較させた。

生徒は3～5人のグループになり、リーフレットに書かれた2人の政策や経歴を参考に「玉野出身だし、雇用を生み出すのは大事」「女性なら子育てのことも真剣に考えてくれそう」などと話し合い、意中の候補を絞り込んだ。

体育館に移動した生徒は、実際の選挙で使用される記載台や投票箱を使用して1票を投じた。一部の生徒は票を開き、計数、点検する開票作業も体験した。

点検係を担当した3年の今岡舞羽さん(17)は「開票作業がとても細かく、1票1票が大切に扱われることがわかった。10月には選挙権があるので、候補者の政策や公約を理解して自分の考えのもと投票に行きたい」と話していた。

市選管によると、2017年10月22日に行われた前回衆院選・市長選の投票率は18歳46・10％、19歳33・21％、20代前半27・62％、20代後半33・66％だった。

（矢吹喜一朗）

【上】自分の考えで候補者を選び1票を投じる玉野高の生徒【下】疑問票の有無などを確認しながら行った開票作業

公正な選挙へルール学ぶ

胸上小

25日は胸上小でマスコットキャラクターを決める選挙があり、市選管職員が本物の投票用紙交付機や投票箱を持ち込み、6年生13人が、平等、平和に決める手段として投票による多数決を実践した。

市選管職員が、話し合いで意見が割れたとき「けんかで勝った人が決める？　ボスに従う？　そうならない方法が投票です」と説明。自由で公正な選挙を実現するルールとして、1人1票▽本人が投票▽候補者1人に投票する▽誰に投票したかは秘密―を挙げ、「決まったら従おう」と呼び掛けた。

投票を前に候補となったキャラクターを説明する児童

候補は、鳥の姿でおにぎりを握るのが上手な「のりっぴー」、みんなの笑顔のあいさつから生まれた「ウパ」、明るく照らしてみんなを元気にする「太陽のムーネ」の3点。児童は各候補の気に入ったところを書き出し、グループで話し合ってから、記載台に向かった。

開票の結果「ウパ」が選ばれた。考案した松田美海さん(11)は「開票は緊張したけど、胸上小らしさを評価してもらえてすっきり。大人になったらルールを守って選挙に行く」、「太陽のムーネ」が次点になった藤井琴音さん(11)は「1位でなくて残念だけど、これからはウパを応援したい」と話した。（松山定道）

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。